第５回　現代への飛翔(2026 年 1 月 9 日開催)

第１セッション　M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

・現代の日本の政治体制である資本主義が、本来の意味合いを持っているとは考えたことはなく、ただただ金を増やし続けることが精神として根底にあったという説に驚かされた。ただそれは同時に無力感から来るもので、神というよりどころを失った人々が行き着く先が金だったと考えるならば、今の世界のシステムを単純に捉え、「金を稼ぐために勉強して偉くなる!」とは一概に思えないと感じた。対話で長文に渡るこの文章を自分の言葉で噛み砕くことができたと思った。が、あくまで理解を軽くしただけであり、当時の人々が抱いていた生への絶望、神への依存、金への依存に至る背景、これらすべてに共感、理解できたわけではない。今後も読み返し、自分の考えをリニューアルしていきたい。

・キリスト教信者と資本家の相関については近年話題となるので気になっていました。原因と結果が入れかわっている議論も世界には多いなか、今まで自分が知らずにいた歴史的事情、宗教的観念をもととしたこのテキストは新鮮でした。また、これまでのテキストと比較して近年に記された著作物だったので、みなさんが例に出した現代の出来事が印象的でした。

・「職業（ベルーフ)」、「天職（ベルーフ)」「召されている（ベルーフェン)」というベルーフという言葉の意味の違い、尚且つ、職業を神が与えた使命として書かれているのがとても興味深かった。また、第二章での”予定説”では、神から救済を受ける人はあらかじめ決められているという説になってしまうのでは、と思ったが、それが個人主義の根となり、国民性を作り出すという視点に関心を持った。

・タイトル『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読んだときから、二者の関係性に疑念を抱いており、本文を読んでみてもプロテスタンティズムのあり方、資本主義の精神、予定説について列挙されているようにしか読めなかったが、対話を通じてプロテスタンティズムと資本主義にある共通性がくっきりとしてきて、文章の全体的つながりがわかった気がした。しかしながら、「孤独」「個人主義」といった論点に触れることができなかったので、そういう部分のつながりが追究できなかったのは悔やまれた。予定説を受けてもなお、恩寵の地位を確証するために禁欲を行う人々を知って、はかなくも思われた。

第２セッション　E・フロム『自由からの逃走』

・私は権威に抗うのが好きな方で、特に中学生の頃なんかは”無言清掃”の呼びかけに反抗して友達と話しながらもものすごく丁寧に清掃してみるなどしていたが、今思うとやたら、権威・権力というものに固執していたなと思う。また、先生もおっしゃっていたことだが、自らの権威主義的性格に自覚的になることは、大変重要だと感じる。客観的に自分とある物事や、ある人との関係をみつめ直すことで、現在の自分の輪郭がはっきりしてくるのではないか。

・自由は自らの理性、意志、良心によって決定すると考えられていたが、それが実は内的権威や匿名の権威によって生じたものなら、人間の真の自由は何によって生まれるのか。自らの内部から生まれた良心であってもそれに逆らうことができなければ、それは自由となるのだろうか。権威主義者は、権威と戦うことで、無力感を克服しようとしているのが、自分にもあてはまっているようで面白かった。服従へのあこがれが残っているのはなぜなのかよくわかっていないが、超常的な力に決定されているという予定説的な特質があり、唯一の幸福が服従であるというのはなぜなのか。

・本文を頭から１つひとつ丁寧に解釈を進めることができ、とても建設的な話し合いを進めることができた。筆者が掲げているテーマ＝問いに対して各段落の意味を考え、言葉の言い換え部分などをつなげることによって読み進めることができた。「人間は皆権威主義的性格（＝自由の束縛を愛す、過去を重視、宿命観、無力感を打ち消したいがために権力の傘下に入る、服従＝英雄）を待っているがゆえに、服従を愛する。その源は孤独を恐れるという所かもしれない」という結論に至った。だが、なぜ「過去」なのか? はわからなかった。人間の

関係は全て力の優越と劣等の関係というのは、本音では嫌な考え方だし、そこに無力感が加わるとギスギスしそうだが、ファシズムが誰にでもその芽があることを考えると、これも逃れられない人間の性の１つであると受け入れるしかないのかもしれない。

・人間は服従する権威を常に探し求めるというフロムの主張はたいへん面白いと思った。フランスで革命が幾度となく起こった理由は、フロムの主張に従えばフランスの民衆がマゾヒズム的な憧憬を強く持つからだということになると思うが、これに私は深く共感した。また、自分事として考えると、私は支配するのが面倒に感じるので、どちらかと言うと服従する方を好むのだが、対話を通じて、無意識に自分はあらゆるものに服従しているのだと気づかされ、感動した。この作品で論文を書いてみたいとも思った。